

ねこ税



住宅街のおしゃれなカフェで、おばさんたち五人が、にぎやかにおしゃべりしている。そのうちの一人が、トーンをあげた。

「来たわよ、ついに！うちのねこ、ランクAだって。まあ当然かな、うちのレミアちゃんは、血統書付きのスコティッシュフォールドだし」

「お宅のは、お人形みたいにかわいいものねえ」

「それにしても市もいやなこと考えたわね、ねこの飼い主に税金かけるって。しかも、ランクつけて、税額変えるなんてありえないわ」

「AからEまであるんだって。そのランクで額がかなり違うのよ」

「何考えてんのかしら、あの市長」

「ねえ、そのランクってどうして見分けるの？」

「だから認定のプロがいるのよ。その人が家に来るの、順番に」

「なんかいやーねえ」

「木村さんちは税金かからないよね、絶対」

だまってみんなの話を聞いていた木村友子は、急に話を振られ、コーヒーをこぼしそうになった。作り笑いの下で、ピクピク頬がこわばった。

「あははー。税金安いと助かるわ、我が家は。あははは」

友子の言葉にちょっと気まずくなって、ねこ大好き主婦のたわいもないティータイムが、やっとお開きになった。

友子は、家に帰る道、ぶつぶつ言っていた。

(確かに、うちのタマは、いつもむすっとして人に懐かず、愛嬌もない。毛はごわごわでデブ、ずっとノラだったから目つきも悪い。でも、私には世界一かわいい子。まあ、DでもEでもなんでもいいや。ポチはポチだもの)

それから三日後、その認定員はやって来た。首からぶら下げた市からの委任証を見せながら、もごもごと説明した後、家にあがりこんだ。タマは、その職員をジロッと一瞥すると、

「フー！」

一度、歯を見せて威嚇すると、後は素知らぬ顔で、向こうへ歩いて行った。のっそりとお腹をゆらしながら。

突然、職員は、両手を挙げて叫んだ。

「おー！なんとすばらしい猫だ！この歯ならび、ユニークで野生的だ！きりっと引き締まった目は、まさにアジアンビューティ！堂々とした歩き方！貫禄のあるあの体型！人に媚びない毅然とした態度も、昨今の猫には滅多にお目にかかれません！毛づやも毛色もワイルドで、ありのままの姿を大切にされる飼い主の愛情が、ひしひしと感じられます！なんと言っても、タマという古風で愛らしい名前がいい！キラキラネームブームに一石を投じておられるのですね！」

職員は、高らかに言うと、何かを書類に書き込んだ。そして、ポカンとしながらも、自然に頬がゆるんできた友子に向き直って、コホンと一つ咳払いをすると、厳かに言った。

「というわけで、お宅の猫は、Aを飛び越えてランクSと認定されました」